



普陀洛傳記

壹

千厓文庫

文庫24

A594

1

普陀洛傳記

3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60

文庫24
A594
1

34
35
36

11
12
13

西國順礼
三十三所

普陀洛伽記序

鍾曰昔在靈山名法華今在西方
名阿彌陀娑婆示現觀世音三世利
益同一身

名けのりり帯れ乃く多きれと

おあーきねの月をこそ見るん

あまのよめるなれりあまに序更

わうさ人男せうけ得更竟天舞日は
ほたふ海あまの城はあ業のあら
しむるあおゆけあきほめくらみん
道ひらく山河万里に果てぬを
昼夜ふ厭救世夫士の淨刹二十之所を
順ねし常急慈悲教をい思業の傍消滅
し東也吾所の國跡を流りんとて家
昌河初なるの四糸道場より於て實に

二年六月朔より九月十九日迄
 八日の法談ありて不可説なるの境
 法よりわきまありておもしろ十分そ
 かし法を同志の人と熱心せんと
 する事あり

善陀流傳記惣目録

卷 一

一 西國より所領礼の中來

龍山院より所領礼の中來

卷 二

一 一妻紀別室の郡所領山親也る

所生御上人所領とて荒所のり

一 二妻紀所領とて所領也る

附 后初神鏡馬の事

巻 二 卷

一 之妻紀引助智知かざし村粉河

親世名

巻 三 卷

一 之妻紀引助智知の尾牙仙掌院親世名

附 親世名 仙掌院より来るものなり

一 之妻河内は高井寺親世名

附 高井寺え地獄ふ落るもの

巻 四 卷

一 之妻高井寺親世名の利中を蒙るもの

一 之妻大如園臺地親世名

附 高井寺市石思誠のもの

巻 五 卷

一 之妻大如園寺親世名

附 長門金多町の石姓娘破紙

一 八幡大和國長生寺親也名

一 長生寺親也名利生寺

一 所 廊下并に居るもの

一 長生寺親也名利生寺

一 所 廊下并に居るもの

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 長生寺親也名利生寺

一 十二要述は玉岩同牙記也者

巻く上

一 商の徳事

商の徳の徳事

巻く十二

一 十二要述は玉岩同牙記也者

巻く十三

一 石山寺記也者は利生事

一 海寺記也者は利生事

巻く十四

一 宗良記也者は利生事

一 十要述は玉岩同牙記也者

巻く十五

一 徳園記也者

徳園記也者

一 十要述は玉岩同牙記也者

一 所 大佛三子三同堂三事

并 瀧口横花三事

卷之十六

一 十之五山城山清水寺観世寺

所 国府將軍伽藍建立三事

并 法華山鬼形三事

卷之十七

一 盛久詔書を以て利を蒙る三事

所 東法華寺三事

卷之十八

一 十七番山城山清水寺観世寺

所 石上人中身三事

并 多佛の起三事

所 三子中身三事

所 土地の起三事

卷之十九

一 十八妻山御土に南寺頂法を記せる
所 聖母太子法王は現る

巻之三

一 十九妻京の草堂に聖母記せる
所 麻子と聖母に記せる
花島村左記を伝へて記せる

巻之二十一

一 二十妻山御土に南寺頂法を記せる

所 聖母太子法王は現る

巻之三

一 二十一妻山御土に南寺頂法を記せる

所 聖母太子法王は現る
蓮花山御土に南寺頂法を記せる

巻之三

一 二十二妻山御土に南寺頂法を記せる
所 聖母太子法王は現る

巻之三

一 古之妻橋津の猫尾寺に記せしむ
河津和希橋尾寺に所記しむ

巻之四

一 後唐の古妻橋津に記せしむ

一 古妻橋津の中山寺に記せしむ

河津利生に記せしむ

巻之五

一 中山の月洞の古妻橋津に記せしむ

河津良女に記せしむ

巻之六

一 古妻橋津の古妻橋津に記せしむ

河津領大の古妻橋津に記せしむ

一 古妻橋津の古妻橋津に記せしむ

河津法乃仙人の古妻橋津に記せしむ

巻之七

一 市七五五 接摩山書家と記せる

所 初より後へ記せる

一 市八五五 丹波山成りて記せる

所 之より後へ記せる

是 功地多しと記せる

是 市九

一 市九五五 若狭山と記せる

所 是より後へ記せる

一 市十五五 近江井田山と記せる

所 巨勢金屋山と記せる

是 市十

一 市十一五五 近江山と記せる

所 白旗大明神と記せる

一 市十二五五 近江山と記せる

所 人奥の山と記せる

是 八下山と記せる

宿人二人上人の前ふりてあゝ閻魔王
より使より上人を携ひてしその作
りてあゝところをいへ上人を執りて閻
魔王よりのはちとらふ祥延一といふれ
早とあゝし業因をいふとこのあゝは
と二人上人あゝてあゝ業因をいふ
る跡をいふと遠向ふは決城有様あ
とあゝいふて見よ大門大殿とて生
結持

金泥珠玉をちりてあゝ光り輝き
とあゝを解くれば則上人を大勢に
魔王出さるゝあゝあゝを念ふとあゝは
災玉の如く上人の業をいふとあゝ
よりてあゝつるあゝとあゝ閻魔王の
甲くこれとて今日のあゝ地を
世なる洋とてあゝ地をいふとあゝは
をいふとあゝの地獄はあゝのあゝ

二十三年^{こい}不^ふ才^{さい}を分^わち縁^{えん}に附^ついて未^ませの
所^{ところ}生^なを済^{さい}な^らしむた^た新^{あら}白^{はく}地^ちの事^{こと}も
是^{こゝろ}知^ちる人^{ひと}もあ^あく生^なと告^つ報^{ほう}をな^なる^る惡^{あく}業^{ごう}
を修^{しゆ}り目^めく小^こ死^しし來^きる元^{げん}の極^{ごく}楽^{らく}一^{いつ}邊^{へん}
仍^{なほ}者^{もの}あ^あく只^{ただ}地^ち獄^{ごく}へ落^おち^ちる考^{かう}の多^{おほ}き事^{こと}
胎^たまハタ之^の而^られぬ^ぬ氣^きを^を知^ちる悲^{かな}
め^めは^は皆^{みな}氣^きと^とあ^あり^りし^し作^{つく}る^る罪^{つみ}怨^{をん}の輪^{りん}に
心^{こゝろ}の鬼^{おに}は^は青^{あお}く^くなる^る事^{こと}は^は是^ぜ非^ひも^もあ^あく^く平^{へい}

は親^{おや}世^よ方の降^{くだ}土^{つち}の事^{こと}を^を所^{ところ}生^なに^に知^ちる^るの
新^{あら}者^{もの}は^は利^り益^ぎを^を求^{もと}めて地^ち獄^{ごく}の苦^{くる}患^{えん}にあ^あら^らる
よ^よと^とし^して^て告^つ知^ちる^るも^もむ^むき^きの^の法^{はふ}
修^{しゆ}る^る上^{うへ}人^{ひと}の^の誠^{まこと}不^ふ善^{ぜん}後^ごも^もあ^あく^く名^な佛^{ぶつ}を
る^るあ^あら^らる^る親^{おや}を^を求^{もと}めて降^{くだ}土^{つち}の^の所^{ところ}を^を知^ちる^るせ
未^ませ^せ不^ふ法^{はふ}め^める^るや^やむ^むい^いあ^あら^らる^る利^り益^ぎ修^{しゆ}る^る一^{いつ}な^なな
り^りも^もは^は善^{ぜん}地^ちを^を回^{めぐ}る^る衆^{しゆ}の^の意^いを^を不^ふ光^{くわう}明^{めい}を
め^めち^ちて^て一^{いつ}百^{ひやく}千^{せん}の^の地^ち獄^{ごく}を^を踏^{ふみ}破^{やぶ}る^るの^の功^{こう}徳^{とく}を

わけて御小園王より海より右に宝庫
を手に持ておとせしを手に宝庫に居る
くまの山く宝庫の中より宝庫の連
一はたを手に持ておとせしを手に宝庫
は宝庫を連てしを手に宝庫の先達
と御小園王より海より右に宝庫の
連てしを手に持ておとせしを手に
はたを連てしを手に持ておとせしを
手に持ておとせしを手に持ておとせし

ふ徳園王より海より右に宝庫の
納めて中山より納めて海より
十方法より海より海より海より
佛より海より海より海より

佛より海より海より海より
たは海より海より海より

徳園王より海より海より海より
の海より海より海より海より

奥州^{おくしゅう}介^{すけ}が濱^{はま}市村^{いちむら}に^{そと}穢^{けがれ}生^{なま}しく^{めいど}眞^{まこと}なる
の物語^{ものがたり}や、ふ^ふ阿^あ王^{おう}の^う白^{しろ}を^を也^や也^やとい
云^いふ^ふも^も知^しれ^れハ^ハ其^{その}あ^あの^の遠^{とほ}き^きな^な。右
今^{いま}阿^あ魔^ま王^{おう}の^の像^{ぞう}を^を造^{つく}る^るふ^ふ悉^{ことごと}く^くする^る海^{うみ}
く^く思^{おも}ふ^ふ一^{ひと}の^の形^{かたち}を^をり^り其^{その}ふ^ふ已^{おの}ま^まく^くう^うん^ん
而^{しか}に^に其^{その}あ^あの^の惡^{にく}人^{ひと}を^をふ^ふ己^{おの}ま^まの^の惡^{にく}い^い奴^{やつ}と^と胸^{むね}
み^みは^はけ^け怒^{いか}り^りあ^あの^の名^なを^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}
な^なれ^れハ^ハ思^{おも}ふ^ふも^もあ^あの^の名^なを^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}
な^なれ^れハ^ハ思^{おも}ふ^ふも^もあ^あの^の名^なを^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}

せ^せま^まあ^あ是^この^の人^{ひと}の^の界^{かい}を^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}
な^なれ^れハ^ハ思^{おも}ふ^ふも^もあ^あの^の名^なを^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}
な^なれ^れハ^ハ思^{おも}ふ^ふも^もあ^あの^の名^なを^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}

花山院御願礼

三十三^{さんじゅうさん}所^{ところ}の^の願^{ねがひ}礼^{れい}一^{ひと}あ^あの^の中^{なかつ}山^{さん}を^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}
な^なれ^れハ^ハ思^{おも}ふ^ふも^もあ^あの^の名^なを^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}
な^なれ^れハ^ハ思^{おも}ふ^ふも^もあ^あの^の名^なを^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}
な^なれ^れハ^ハ思^{おも}ふ^ふも^もあ^あの^の名^なを^をり^りく^くる^るも^も又^{また}人^{ひと}

諸より始り花山院より十次冷泉院の法
皇より是は年七御しては位より位にまゐ
はるる言ひおぼしきのは娘あり御うふ藤
原の爲に之の法娘あり内をうめ弘徽
殿よりあれは寵幸深うべし御うふ藤原
より一御より寵を深うは難い弘徽殿
に在りす所ありこそぞんといふやこ
に弘大内裏より弘徽殿の御も多くとは接

度大しして又女御ありたどいふ女御連も
三千人備へり。年中弘徽殿は法親王源
より依ては威勢日増し。今ハ春日の奉
内より女と云ひの弘徽殿よりありこそぞ三千人
の女御あり日増しとあれは弘徽殿は一
人としてその人の御もあつた何れもつた
まゐるは年十七歳より法親王にまゐ
帝の法親王より中よりありこそぞれも今

つをむら^{おきり}伐^きとくも^こんされ^るは^る孔明^{こうめい}著^{しよ}る^るこ
む^るお^るる^る軍^{ぐん}田^{でん}の^の言^{ごん}白^{はく}道^{どう}華^かの^の持^ぢを^をむ^る
廟^{めう}あ^をと^と所^{しよ}ふ^ふ忘^{わす}れ^るむ^るふ^ふ如^に通^と於^に五^ご
て^てつ^つち^ちふ^ふこ^こも^もと^と持^ぢり^りく^くを^を希^きは^は境^{けい}て^て
そ^そを^をお^おも^もは^は境^{けい}ら^らふ^ふ素^そ子^し瑛^{えい}室^{しつ}乃^の王^{わう}位^い膝^{せき}
命^{めい}終^{しう}時^じ不^ふ悔^{かい}者^{しや}と^と云^い大^{だい}集^{しふ}終^{しう}の^の文^{ぶん}を^をあ^あ月^{げつ}
う^うう^う城^{じやう}ふ^ふ死^しす^すれ^れい^い事^{こと}あ^あと^とい^いと^とも^も傳^{でん}を^をふ^ふ者^{もの}
な^なく^く室^{しつ}と^とも^もあ^あら^らな^なだ^だと^とい^いを^を別^{べつ}れ^れく^くも^もあ^あら^ら

なる^{なる}し^し差^ささ^さと^とて^て移^{うつ}ら^らあ^あし^し位^いら^らふ^ふと^とえ^え通^と
れ^れに^に夢^{ゆめ}幻^{げん}の^の深^{ふか}き^きと^とは^は衆^{しゆ}ん^んあ^あま^まさ^さを^を
あ^あひ^ひ寛^{かん}の^の二^に年^{ねん}と^とい^い月^{げつ}は^はち^ちの^の夜^やふ^ふ入^いて^てた^た中^{ちゆう}
辨^{べん}是^ぜ成^{じやう}中^{ちゆう}納^{なつ}と^とい^いは^は後^ご々^々の^の人^{にん}を^をは^は傳^{でん}つ^つま^ま
さ^さや^やあ^あの^のく^く西^{さい}洞^{どう}足^{そく}通^とと^とを^をあ^あ初^{はつ}の^の時^{とき}明^{めい}く^く家^け
の^の市^しを^を通^とと^とを^をあ^あふ^ふ時^{とき}明^{めい}は^は果^{くわ}々^々と^とい^いは^は地^ぢ
兼^{けん}々^々の^の夜^やふ^ふあ^あめ^めれ^れと^と未^み以^いも^もち^ちに^に涼^{りやう}と^と疾^{しやく}
つ^つり^りじ^じが^が穴^{けつ}を^を穿^あけ^けて^てあ^あら^らむ^むと^とい^いは^は天^{てん}の^の位^いを^を通^と

れむまの天文は歌れううりて踏さ
内裏へ幸ふ花山院此の寺なり古てあり
石の明りやを仰れそまを立返る
て山科の花山へはまゝなる内裏より
晴明を走るふ始てはまを知らず
彼と云ふれと更にはり告知に
曉くふ山科は信長より半くれど
子來の内は信長もあつたをいほ名

を入ると勢をいした中辨是成
臣中判と良藤も力のあふ熊野に
お移りへは来訪するまゝとありて
熊野の禪を信長もいほま
信長もいほ熊野もいほま
所移りては威をいほま
信長の是は信長もいほま
こと威をいほま

親也音の降云々之わら昔大和^{ちう}と初
 明も清徳乃丈人、同慶王公此降云を一
 衣取おしゝる者地勢小落たと同慶
 王のは振多^{ちう}いゝとて証^{しう}一と宝字を信乃
 久へ候ゝと中山より納めて事告部
 方のもま場^{まばたけ}に午之所を照礼^{てうれ}りゝるゝに
 後^{のち}流^{りゅう}て田^{めく}ゝ者りゝは法皇是が先達
 を成して詔書其之所の降云を廻り初

めあふ——案内者として河内西石河
 寺佛眼上人と云ふ名僧より此を尋ねて
 一と告るるが法皇より勅を在極
 る要場としてありて天子の御下にて
 河内の王は昔よりして石河寺に眼
 上人は對面してあるが龍山の法皇より
 無罪に取戻す法神告を蒙りて其の今日
 中より於て之をその教を授け降下して是

を上人能知りしなり。明礼の業因を上人
形む。——と。移取の法をこと作らるれは上
人の法を流し。十善天子は法を捨て
有難き法を忘るる。去るは法。——と。え。仏眼
上人は無明。移取も法。依の爲。生。一。事。不。能
時。一。月。多。詣。ま。り。と。思。ふ。より。し。と。那。智。山
一。事。と。成。り。う。う。る。佛。眼。よ。う。の。目。も。老。の
を。放。ち。て。移。文。を。後。と。す。移。の。名。僧。なり。

是より。少。少。て。佛。眼。と。う。り。あり。弘。微。殿。の。救
世。観。世。方。の。変。化。を。う。り。眼。不。弘。微。殿。と。形。を
取。り。一。眼。に。移。取。の。利。益。を。有。り。と。是
情。り。花。山。院。と。名。を。移。取。を。名。と。せ。多。く
と。観。者。の。法。云。の。字。之。所。の。も。と。を。示。さ。せ
る。今。世。ふ。思。ふ。る。あ。の。所。之。所。の。法。眼。を
と。す。之。首。と。別。ち。花。山。の。法。眼。佛。眼。と。今
明。禮。一。と。名。の。法。眼。なり。

芳院諸氏記巻之五

一、安紀列室の郡那智山記せる

由多如言悔能るはまそ大

酒人皇十七代仁徳天皇の法号として

高う御小登りて足必懸なり

民のかみと云ふ振りのふきり
法号なりと云ふ法号は法目の子(満)なる時
代なりと云ふ法号は法目の子(満)なる時

移りて来たるは、
 不^い信^むを結^{むす}ひ報^うぜる
 を急^{いそ}ぐも、
 法^{はふ}を以^{もつ}て不^ふ佛^{ぶつ}法^{はふ}なるべし、上
 人^{じゆん}が邪^{しや}ふ誰^{たれ}か信^{しん}する者^{もの}も、
 一^{ひと}生^{せい}信^{しん}トせり
 玉^{たま}と上^{かみ}人^{にん}の生^{せい}の流^{りゅう}は、
 朽^{くち}果^{くち}て報^うぜるも、
 雨^{あめ}露^るふくも、
 流^{なが}る報^うぜるも、
 石^{いし}年^{ねん}果^{くち}て、
 生^{せい}佛^{ぶつ}人^{にん}とせり。

上人無雙の事傳ありしは後現の法告り
 汝よくこそ事なり若しあふも重場なり
 福形上人をも云傳ありし今此佛も深き縁の
 多者今も伝ありしなり者もあふも深き縁の
 宜しく是を伝ありしに早くは佛を告り
 事なりは法告りし生佛の人の法告りし法告
 りとあふし大教の事を告りし後現の法
 告りしは法告りし生佛の人の法告りし法告

永能知と能とも何もの而に煩れはた
ますとてんはる知人永信を以ては
聖佛を祈りてしむれとのほろとて
うすさるゝと知智の勝臺に就入
聖佛あるを由ては勝と出ぬる大
とて勝の勝は成て死するはいつとて
此にとるゝと教勝はうこれに祈りて
は聖天のう成るを聖身をせぬ此の如

ひ(聖)まうそんは川に流れをを
そん天勝りて人を引きて勝を是の意
松中一玉の自然と天勝りてあるは
そとるは玉の海余りてうきに流す
今既下流して常流の如を梵天勝り
哀と玉の玉と天勝りて勝とのほ
ありた勝りて勝りて勝りてと有
はうのうと勝りて勝りて勝りてと有

ふ依て命を賜ふとせしと身を命に
天をとおしきりあるとそとの光り
光し身命をとおしきりあるとそとの光り
ふにたふけは死するとも生ずる死智
りなりあるとせしとあるとそとの光り
ふにたふけは死するとも生ずる死智
る夜光の光りあるとせしとあるとそとの光り
光の光りあるとせしとあるとそとの光り

を命に命を賜ふとせしと身を命に
天をとおしきりあるとそとの光り
光し身命をとおしきりあるとそとの光り
ふにたふけは死するとも生ずる死智
りなりあるとせしとあるとそとの光り
ふにたふけは死するとも生ずる死智
る夜光の光りあるとせしとあるとそとの光り
光の光りあるとせしとあるとそとの光り

のうらなひも実なる末世に於て師あるは中なる
こし佛ありて末の世にありとも失ひなり
うと一丈の大佛の銀を造るを造るなり
は猶ふし佛を祀りたりふりてあり生
佛なるの宗を奉る

法華寺

善陀活と云ふ此の世の南に銀を
造るなりは山にありて法華寺なり

善陀活と云ふ此の世の南に銀を
造るなりは山にありて法華寺なり
やう所のふみけに西万極楽のたうに
ふすますす善陀活と云ふ銀をの
うて七宝を以て莊嚴せりササ常と説く
善陀活と云ふ善陀金の宝殿に二十八部
衆の大神を祀りて法華寺なり
る佛なる佛ありて法華寺なり

瀬瀬者妙智方より法者をせり岩折浪
ハニ無所なり妙智のほ山より等々瀬は瀬と
瀬の者凡夫の耳より只陶々字ゆれと
も若院路山より浪より同々々々々々々々々
新と懐の耳より能く聞くも聞くも凡夫
の耳より聞くも聞くも聞くも凡夫
能く聞くも聞くも聞くも凡夫

妙智の瀬より花山院極（祇神歌）
如空宝珠と水晶と水のほくく貝を
若より文書より人より見る滝よりおきて不
動よりおきて不動より不動より

二妻紀伊小紀井と記せむ
宝永五年建仁護持院と号す

紀伊名草郡若菜院深山金剛湧と号す
本寺土面銘を有は長一天二寸深山六道
光之入ち号金剛湧と号す之を紀井と号す
云はば山ふふとこの井らうと号すは井が記
多之新まふ龍形わが龍形松の大木ふ

掘りて記すは山ふふ松松を龍形の松と云
ふの井は清浄水吉福水善老水と云ふ
山道と号す人の接付小天と号すは山道
と熊野と号すは山道と号すは山道と号す
紀井と号すは山道と号すは山道と号す
中本大木と号す一夜を記すは山道と号す
以数子足馬の馬と号すは山道と号す
山道と号すは山道と号すは山道と号す

あくあも白と横雲たふしきと
の海を去つてとて高きを尋ねて見ゆふ
勢たる森の月より少き祠を招ひ氏
因うと神ありとと例をくきて
見ゆふとをきくは終る前足のふ
板割でざりとと離れかゝてと招ひ
は終るものありととさう我様は
来しとて減りととまふ人あはて

祇神てたふは又あ夜の雨に降り終る
の横よりとを終ひ今春はぬ何とん
と待たふ又あ夜のぬくるとは是を
びとと金とてあまるとはあまると
ありあのぬく雨にとては海より
うたはるるるとは出旅の落ると
れ足を並一貫ひあまるとあり
しとと連てりきすねの七つと

何の事をもて佛の成經文を唱へて言ふを
 五^{わけ}はなして一面經せざるの像を作りたまはれ
 亦成經の爲善つ面を降りさるゝと云へ
 翁は乃て成經より上人は藝を而の者
 語り大木を創經者の像を作りおまへ
 の者より細い尺病神の爲又永くは
 て御念ふのみおまへこそ人の長り
 翁の事を述べてはなして上人の像の爲

他新事りて上人の法座（おけ）とて安んずるな
 此若しを（つ）通れし之能者の着属（しんぞく）と
 成りては（う）類（る）くおぼさる祠（わ）の肉（にく）家
 像あり是を孝母（くさうぼ）と云ふい南無（即）へ
 一と仰て流し（う）と云ふ一と云ふ祠の肉
 等ん由（ゆ）は（は）り（り）も小く作りし本像
 有る事一歳のみく孝母を作り是
 一高（たか）て海（うみ）下流ありて風も（か）く矢の

君物持とふときそ　われ世にのち度うも
 知れ迷ふる如く——柳ふまを袖に籠るは
 以て花えん衣さす来れば、花の都へ能く都へ
 て夢の浮世あれ、夢見て居らうぬくこは
 は詠歌の都へ極楽をさして花の都へと
 云々^{しん}城——や都へ色く^{ちゆう}成て九品の侍ふ
 性生——今^{いま}朝の雲の^{きりぎりす}群を醒^{さます}悟りの
 才と成と詠せ——あはれあなり神と云ふ二つ

皇極志と実者との神と伴路太神を
 始とす。右の神と極志との神と云
 本地の神と云ふ事或は詔書地蔵菩薩如
 玉極と極と對して法を説て事年の事
 斗りてその事と云ふ事神なる神
 と云ふ事と極と云ふ事と云ふ事と云
 事と極と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 事と極と云ふ事と云ふ事と云ふ事

口^{くち}はなをきつて山て多佛の柳子^{いふ}を^{とら}取しと
作^{つく}るは^くおき証^{うし}の如く又^{また}言^い宿^{しゆく}作^{つく}る
之^こ痛^{いた}の神^{かみ}乃^{すなは}ち^はるむふ^ふ格^{かく}よは^は對^{たい}面^{めん}と
あれ^{あれ}き^きして^{して}凡^ふ病^{びやう}の神^{かみ}おき^{おき}き^き作^{つく}と^とい
な^なを^を取^とりて^て未^み来^{らい}の^のを^を取^とりて^て笑^{わら}ふ^ふ之^こ後^ご
る^るの^のも^もふ^ふく^くあ^あら^らう^うた^たき^きも^も終^はり
魂^{たま}の^のく^くし^しの^の或^{ある}を^をお^おや^やし^しの^の終^はり
目^めに^に眼^{がん}の^の終^はり^{なり}たり^{なり}あ^あら^らう^うの^の終^はり^{なり}の^の終^はり^{なり}
き^きう^うる^るの^の杯^{はい}を^を取^とる^るなり

常院源氏礼部式部

香院流傳記卷之三

之妻紀州那賀郡かづ村粉河寺
より親を召して長そより人

人皇萬年天皇元年、建武元年、
大伴孔子良は、孔子良と云ふ、
山より、
時、
何、

よき日ハ鬼一王もさへかた是ハあま
 であて猿の類いあり其一王を本と名い
 うと山に入り二里歩くも雲深く入
 月も西より傾き一たん月を字ぬる
 とそいふが言なり鬼王を字うてぬる
 月ハあまのうそ言く成りかてす
 ちを今てあまの流りて飛越ふとす
 かしもあまの言言のはえりわのり

月夜中
 月もあまんと清き
 星の下と木影よりて月のまゝの
 侍て麻ひり居るよ何と云ふ處に
 光りの指をれい夢をこ目見て
 おろしに筆程の地さ火の玉孔を
 其の今点のねぬ老うおは年月山
 外よりこの程多こと能くはな
 了す何程そハ狐狸の西為た

を名らふ事をほがいきりくと引おぼり
庭もとみひてちう火の玉の光の中とて
こゝろ切てちうにちやうとてとて
忽ち火の玉うつふれ親をた像取れさ
せむいーをとおもれ孔子に討けけし
とふも持をむいりゝ勿然とて佛に
すもをゝゝたふ知んゝておけり
しるはるゝとてとて大地に伏

ありふ親をむいりゝる国に
老めをもちむいれ今ゝゝ親を止へ
罪科の中ふ物の命をむいりゝる
こゝろは沙ふ告りゝるゝ沙母常ゝを
作ゝゝ沙のゝをもちゝるゝと親を
係ゝゝ沙をむいれゝるゝと親を
沙もれに死すゝゝは死するゝと地獄
へ落ゝるゝと永劫に落ちゝるゝと

未耳を叩けぬとせん為不勅諭すくぞと
 傳ふれて孔子は佛敎の事勅諭を
 流しは流教生ふつゝ止りて一に邪業を
 免^{ゆる}るゝとびととん弓も矢も折^く挫^くこれ
 は世を亂ぬのはたうとて物か汝はあふ
 店を能くおふと成て一に不家名を稱
 へて未耳を勅諭を名^なるゝ一に佐の意に
 是れ永く時運へけつたへ一と傳ふる西

[illegible]

獵師のめが安んずる成るは強ひんを強
きくは物めより或時日の暮るはすき
斗りあるききききききききききき
一和度ふ泊てめききききききき
にんんんんんんんんんんんんんんん
ききききききききききききききき
のきききききききききききききき
きききききききききききききき
きききききききききききききき

孔の仏を安んずる成るは強ひんを強
きくは物めより或時日の暮るはすき
斗りあるききききききききききき
一和度ふ泊てめききききききき
にんんんんんんんんんんんんんんん
ききききききききききききききき
のきききききききききききききき
きききききききききききききき
きききききききききききききき

卒^{とく}本^{ほん}堂^{どう}如^に蔭^{いん}を^を建^たて^てし^し 法^{はふ}由^ゆを^を仰^{うやう}ぎ^ぎす^す
 り^りを^を誰^{たれ}も^も陽^{やう}作^{さく}し^しを^をし^して^てん^んけ^ける^るを^を正^{せい}正^{せい}
 公^{こう}事^じ傳^{でん}く^く幸^{しあひ}傳^{でん}く^くを^をし^して^て今^{いま}物^{もの}別^{べつ}也^や
 の^の中^{ちゆう}を^をし^して^ては^は時^{とき}分^{ぶん}を^を表^{あらわ}す^す物^{もの}別^{べつ}と^と云^いふ^ふも^もあ^あ
 相^{あひ}本^{ほん}堂^{どう}創^{さう}立^{りゅう}の^の中^{ちゆう}に^に 河^か内^{ない}金^{きん}濱^{はま}別^{べつ}也^や
 大^{だい}丈^{さう}と^と云^いふ^ふ大^{だい}百^{ひやく}姓^{せい}を^を一^{いつ}子^こに^に大^{だい}丈^{さう}所^{しよ}十^{じゅう}七^{しち}丈^{さう}の^の
 年^{ねん}大^{だい}病^{びやう}を^を罹^{らひ}て^てあ^あ病^{びやう}を^を果^はた^たし^し大^{だい}方^{ほう}を^を死^しに^に却^{かへ}り^りて^て都^と
 より^{より}歷^{れき}の^の医^い者^{しや}を^を招^{まね}き^きて^て種^{しゆ}の^の医^い療^{りやう}を^を是^{こゝ}

一 祈禱^{せうとう}する方なく、重罪^{おもなみ}はいつて赦^{あや}し
 ともあるとて、孫^{ひ孫}にふく子^この赦^{あや}しを祈^{いの}す
 して、之^{これ}の類^{るい}といふ方なく、た本^{ほん}部^ぶを乞^こ
 ふにあふく、何と成^{なり}て何の事^{こと}とていふ
 悲^{かな}しと枕^{まくら}ふふ、歎^{なげ}き、死^しする所^{ところ}に十
 らふ身^み斗^{たた}りある者^{もの}子^こを人^{ひと}より薦^{すす}を濟^さ
 う負^{おひ}垢^ごれ、衣服^{いふく}を着^きて、門^{かど}ふふ、
 連^{つれ}ふふとて、去^さるるを、報^{はう}謝^{しゃ}を乞^こ下^{くだ}されよと

云家因の者^{ちが}影^{かげ}もううつて皆く歎く様子を
足て何るやそなぞと子細を尋ふた程の
事なふ^し私^{わが}思^{おも}ひないを言てゝるやそ業あ
ふ^ふ當^{あた}らうともうさう思^{おも}ひないを言てゝるやそ
元^{もと}の事^{こと}は^は影^{かげ}は^は影^{かげ}なれ^れ年^{とし}の毒^{どく}さふ所
ま^まれ^れ部^ぶは^は部^ぶと^と方^{かた}なれ^れ家^{いえ}因^{いん}の者^{もの}今^{いま}息
切^きぬるやそ^そ部^ぶは^は部^ぶと^と方^{かた}なれ^れ何^{いか}ふ
今^{いま}子^こ誰^{たれ}を^をねむ^むつ^つ方^{かた}も^もを^をねむ^むたれ^れ何^{いか}ふ

もせよと影^{かげ}なれ^れ部^ぶは^は部^ぶと^と方^{かた}なれ^れ何^{いか}ふ
め^めぎ^ぎ病^{びやう}人^{にん}は^は病^{びやう}人^{にん}と^と方^{かた}なれ^れ何^{いか}ふ
う^うの^の中^{ちゆう}を^をねむ^むたれ^れ何^{いか}ふ
其^{その}い^いふ^ふ事^{こと}は^は病^{びやう}人^{にん}と^と方^{かた}なれ^れ何^{いか}ふ
よ^よ非^ひに^に去^され^れる^る事^{こと}は^は病^{びやう}人^{にん}と^と方^{かた}なれ^れ何^{いか}ふ
より^{より}書^かれ^れる^る事^{こと}は^は病^{びやう}人^{にん}と^と方^{かた}なれ^れ何^{いか}ふ
四五^{四五}返^{へん}り^りて^て生^{せい}る^る事^{こと}は^は病^{びやう}人^{にん}と^と方^{かた}なれ^れ何^{いか}ふ
り^りを^をねむ^むたれ^れ何^{いか}ふ

すゑくと痛みの極みと云ふ事よりと創うづへり
病人の赤く余りも白湯も固こまりし月
を穿いたりし使しらは何れにもたて居る日
云々それと家内そのうちの驚き急いそぎ振ふるりたる別
に述つむ白濁も足垂あしなりし到いたして人々の極小
なる今も其病の方々ありけり此ノ旨意のり
めと云ひし者も正當子を欲ひて面おもて奇き
妙ある事ことは是只一人ふてもある事ことと依より

張之政を以て何も咎むべし。然るに其の政を以て
 と咎むべし。今も其の政を以て咎むべし。其の政を
 下されし。と云ふは。其の政を以て咎むべし。其の政を
 咎む。又其の政を以て咎む。其の政を以て咎む。其の政を
 其の政を以て咎む。其の政を以て咎む。其の政を以て咎む。其の政を
 其の政を以て咎む。其の政を以て咎む。其の政を以て咎む。其の政を
 其の政を以て咎む。其の政を以て咎む。其の政を以て咎む。其の政を

はれとすれはたねの初りきとん思あひ
しとふ非に風と通う今とて春の毒り
病とて思あひとて色とてとまを世
い何あらせんと云ふまふ事い何あら
何年片まらうと云ふはたねとす
ううなと何と云ふはたねとす
病とて思あひとて色とてとまを世
れとて思あひとて色とてとまを世
きたふ

しと云ふはたねとて思あひとて色とて
れとて思あひとて色とてとまを世
せとて思あひとて色とてとまを世
村初りきとて思あひとて色とて
病とて思あひとて色とてとまを世
あしとて思あひとて色とてとまを世
あしとて思あひとて色とてとまを世
あしとて思あひとて色とてとまを世
あしとて思あひとて色とてとまを世

たすく使まゝとてあまふ城一の紀あつれ
よりのつとたまふま端畔たき印をつま
能あ那雪那からうと物りちと取れ
ちりまゝとたねのちりつと云ふ忌
のちぬるこかれぬえ改れもせだる又
石のりちりふ山嶺を通りふた水の流れ
は自水の流れあるあつた山嶺ふ人
里まゝと名づゝは流と目も子まゝと成

りふつ一の案の度とて流をねとて
河へてとて案内をさるもせりちりま
ちりとるまゝとて山嶺世を井桶入
う何とせよあふ流へてとて七人の
上下用ふて用意の并者を却ていめ
ま名あふれまゝとて山嶺とてめ
ちの内よ人まゝとて何とせよめまの月
ふまゝとてまゝとて狼藉こととていめ

くうらんある者なりけり家へ何所の山隈
川筋の住居致した太夫と申す者ありき
那賀郡かづ村よりある女を熊と申す
よりふ語違ひはあなまりて成りしめ
ちふら者一夜あふめんと因へて又部の
仕合と云浪川村をまゐり又番内にて隠れ
たり大百姓の七女なりて実小大女と云へば
昔よりぬねの百姓をばり死すにも業あり

すあふりたぬりなりけり花をみぬと申す
今もははるまの西へ移く不月中ありけり
なれき昔よりけりあふ一乗法明りける
一光と灯火様みんとて火を焚けぬ
尋のふ何と何ありあふ何あり物を取
りあふとふたをよきあふりて那賀郡か
づ村にて移りしめあふと云へしとてむ
別ちかづ村と一は是は法明りけるなり

う粉川^{うこなが}とて^うは是こととて先^{せん}と看^{かん}經^{きやう}を後
く後^ご深^{ふか}く^ひは^ひし^し承^うり^りア^アとて^と記^き也
者^{しや}の^のふ^ふは^は光^{くわう}る^るを^をと^とげ^げ名^なを^を唱^なへ^へ物^{ぶつ}
や^やふ^ふた^たま^ま親^{しん}の^のた^たを^をお^おと^とふ^ふ
石^{いし}之^の隙^{きやく}を^を記^きる^るの^の法^{はふ}を^を小^{せう}笑^{せう}の^の同^{どう}を^を持^もて^て
た^た不^ふ要^{やう}ふ^ふに^に能^{のう}お^おと^とな^なれ^れは^は正^{せい}しく^くた^たえ
へ^へと^と笑^{せう}の^の同^{どう}を^を大^{だい}に^に記^きる^るを^をた^たま^まの^の如^{ごと}く^く牌^{はい}を^を
か^かか^かふ^ふと^と正^{せい}知^ちを^をお^おと^とな^なれ^れは^は何^{なん}の^の事^じも^もな^なし

んと^{んと}記^きる^るを^を何^{なん}の^の事^じも^もな^なし
云^いふ^ふと^と云^いふ^ふた^たま^ま記^きる^るを^を何^{なん}の^の事^じも^もな^なし
笑^{せう}の^の同^{どう}を^を正^{せい}しく^くた^たえ^え
才^{さい}を^を持^もて^て相^{さう}の^の正^{せい}しく^くた^たえ^え
世^せの^のふ^ふに^に記^きる^るを^を何^{なん}の^の事^じも^もな^なし
や^やふ^ふた^たま^ま記^きる^るを^を何^{なん}の^の事^じも^もな^なし
今^{いま}の^のふ^ふに^に記^きる^るを^を何^{なん}の^の事^じも^もな^なし
世^せの^のふ^ふに^に記^きる^るを^を何^{なん}の^の事^じも^もな^なし

孝子と成ては中身を焼く其利を懐の銀
きる井に毒薬の比^{くら}成れぬ^{くら}と^{くら}言ひて
膏^あを^あ対^あし^あし^あふ^あは^あ若^あ蘭^あを^あ持^あて^ある^あや^あし^あ
こ^あけ^あ中^あに^あ誰^あ事^あも^あ考^あへ^あし^あ今^あ迄^あの^あ如^あき^あ
こと^あ只^あ利^あを^あ新^あし^ある^あも^あ申^ある^あを^あれ^あに^あ極^あす
こ^あえ^あり^ああ^あと^あ其^あ修^あ法^あも^あ不^あ極^あす^あ極^あす^あ
其^あ方^あに^あ若^あ蘭^あと^あて^ある^あは^あ中^あに^あ其^あ利^あを^あ懐^あく^あ
其^あ利^あも^あ孝^あ子^あの^あこ^あし^あは^あ其^あ利^あを^あ入^あに^あ其^あ方^あに^あ其^あ

其^あ時^あも^あ孝^あ子^あと^あ成^あり^あも^あ利^あを^あ
け^あ中^あに^あ其^あ利^あを^あ懐^あく^あと^あ其^あ利^あを^あ入^あに^あ其^あ方^あに^あ其^あ
又^あ其^あ利^あを^あ懐^あく^あと^あ其^あ利^あを^あ入^あに^あ其^あ方^あに^あ其^あ
して^あ其^あ利^あを^あ懐^あく^あと^あ其^あ利^あを^あ入^あに^あ其^あ方^あに^あ其^あ
く^あ其^あ利^あを^あ懐^あく^あと^あ其^あ利^あを^あ入^あに^あ其^あ方^あに^あ其^あ
は^あ其^あ利^あを^あ懐^あく^あと^あ其^あ利^あを^あ入^あに^あ其^あ方^あに^あ其^あ
て^あ其^あ利^あを^あ懐^あく^あと^あ其^あ利^あを^あ入^あに^あ其^あ方^あに^あ其^あ
れ^あ其^あ利^あを^あ懐^あく^あと^あ其^あ利^あを^あ入^あに^あ其^あ方^あに^あ其^あ

吾々も物あるが如く人の心あるれと實の
あるが如くあると從ふべしと云ふ
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は

如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は
如くあるが如くあるが如く人の性^{せい}質^{しつ}は

善行修徳記卷之三

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, slightly yellowed paper. The script is fluid and characteristic of the 17th or 18th century. The text is arranged in several lines, with some words appearing to be underlined or written in a slightly larger hand. The overall appearance is that of a personal or official document from a historical period.

カヌ
コイノ



奈良市東向通南町四番地

吉田 安治郎

電話 四百三十九番
振替 大阪二二五九番

